

1 「家庭・地域・学校協議会」の設置と運営について

(1) 「家庭・地域・学校協議会」の構成

会長 ―― 協議会 【委員の構成】 14名
事務局 (学校) *地域コーディネーター2名
鳥浜美鳥会会長 日本野鳥の会福井県副代表

<地域代表>

農業従事者 民生委員 中学校生徒指導主事 保育所長
元学校長 スポ小指導者 学校ボランティア

<保護者代表>

PTA会長 PTA副会長 母親代表

<学校代表>

校長 教頭 教務主任 生徒指導主事 保健主事

(2) 協議会の内容

※開催回数 2回

※協議日程

① 6月12日 (水)

② 12月 4日 (水)

※協議内容

①地域と学校の連携

- ・地域連携を通じた学習や体験活動に関すること
- ・児童の登下校や地域活動での安全に関すること

②学校評価による学校経営の改善

- ・学校評価総合シート項目に関すること

(3) 協議会における成果と課題

学校評価シート項目に関する協議に加え、学校教育活動全般の取組の成果や課題を協議することにより、第1回では具体的な改善点を、第2回では進捗状況や成果を協議することができた。また、学校の取組については、様々な立場からの評価を得ることができた。

課題としては、地域代表者だけでなく、地域全体の生の声や意見を学校教育活動に反映させていくという点では、改善の余地があることが挙げられる。体育大会などの行事の際に、意見箱を設置するなどして、地域の声を吸い上げられるようにしていきたい。

2 地域と進める体験活動

(1) 活動のねらい

福祉学習・農業体験 (米作り・野菜作り)・漁業体験 (網漁) などの体験学習、「三方の宝」について外部に発信したり PR したりする学習を通して、自らが積極的に地域に関わっていく中で、三方の良さを再発見・再確認し、三方に誇りと愛着をもつ児童を育成する。



(2) 活動の実際

① 「ゆりかご田活動」 (5 学年)

全校で取り組む「ゆりかご田」活動に、5年生が中心となって取り組んだ。今年も無農薬での米作りに挑戦しながら、田んぼでコイやフナを孵化、育成させ三方湖へ放流した。「環境にやさしい農法部会認証米」に認証され、地域のイベント「若フェス」や研究者の発表大会「NORNAC」で活動発表を行った。地域のイ



イベント「熊川いっぷく時代村」では米販売をしながらこの活動の意義を発信した。社会科「農業」「水産業」「これからの食糧生産」の学習とも関連させながら、地域の農水産業の大切さや課題についても探究した。(5 学年)

②「三方の宝、見つけてふれて発信しよう！」（6学年）

総合的な学習の時間のテーマ「三方の宝、見つけてふれて発信しよう！」のもと、地元においてもなかなか訪れたり触れたりすることができない町内の名所や伝統文化などの「宝」に、実際にふれる活動に取り組んだ。レインボーライン、うりわりの滝、熊川宿、年縞博物館、縄文博物館の見学、三方湖でゴムボート体験、たたき網漁体験学習と、湖の幸であるコイ・フナの試食といった学習活動をした。また、学習したふるさとのよさについて、修学旅行先で工夫して発信することができた。（6学年）



(3) 地域コーディネーターの活動概要

- ・ゲストティーチャー・ボランティアの紹介、連絡調整
- ・児童への指導、助言

(4) 特に工夫した事項

- ・児童は自主的な「プロジェクトチーム」（雑草対策、コイ・フナ、蛙、田んぼの撮影等）を立ち上げ、どうしたら無農薬米作りや、魚の育成と放流がうまくできるか実験や調べ学習を重ね、楽しみながら探究した。（5学年）
- ・若狭町に住みながら、地元の宝ともいえる名所や事業、伝統などをあまり知る機会がなかった児童らと、地元の宝に実際に見たり触ったり感じることができていることを大切に、活動の計画をした。（6学年）

(5) 成果と課題

- ・三方湖へ1,600匹のコイやフナを放流し、田んぼでは両生類や昆虫類の他、イチョウウキゴケやシャジクモなどの絶滅危惧植物も保全できた。除草機の使用や、発芽条件によるヒエやコナギの発芽抑制など、無農薬による農法の研究ができた。「三方五湖自然再生協議会」の「環境に優しい農法部会」や「湖と田んぼのつながり再生部会」とも共同し、「環境に優しい農法認証米」第1号になり、地域の農水産業や生態系保全の大切さを地域に発信できた。三方五湖の周りで、人も生き物も元気になっていくため、これからも何ができるかを、地域の方たちとともに考え続けたい。（5学年）
- ・実際に自分たちの目で見えて触って感じて考えたことで、児童がふるさとへの思いを強く持つ効果が高まった。地域コーディネーターには、地元の伝統的な文化の名人や場所などとコーディネイトいただきながら、さらに深い活動をすすめることができた。活動を通して、児童らは改めて自分たちのふるさとの良さに気づき、伝統の重みや、それを大切につないできた方々の思いを感じ、それらを修学旅行でも発信することができていた。（6学年）
- ・「地域の方と学習や体験活動を行い、地域や社会への関心が高まった（学校評価アンケート）」と回答した児童が96.6%に上ることからも、積極的に地域と関わる活動に参加していることがうかがえる。また、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」という質問に対しては、全国学力調査児童質問紙の結果（全国54.5%、福井県58.7%）と本校児童の結果を比較すると、本校児童（3年から6年）の91%が肯定的な回答をしており、意識の高さがうかがえる。この数値は昨年度よりもわずか（2%）ではあるが高くなっている。全校活動の「ゆりかご米栽培」の他、各学年の発達段階に応じて、子どもたちが企画・立案する体験活動を実施することにより、児童の自主性・主体性が育ってきたためと言える。（学校評価アンケート：地域人材の積極的な活用から）